

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	20 / 2006 / 20-25
タイトル	銀の魚に夢を託す
著 者 名	川村洋子

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

銀の魚に夢を託す — シナイモツゴ郷の会の活動を通して思うこと —

第27代 川村 洋子

1. はじめに

受話器を取るなり、この一声。「見だよー、テレビ！」某民放の県内向け番組で、泥まみれの私のドアップを見た、友人からの電話である。それは、4月初めの肌寒い雨の日、だだっ広い田圃にヒシの実を播いた時の模様であった。

このヒシ播きは、これからお話するシナイモツゴ郷の会(以下郷の会)のプロジェクトのひとつ、ヒシの特産化事業の一環である。何故、希少魚を守る筈の会が、ヒシなどを育てることになったかについては後に述べるが、サカナからヒシへと発展するこの“脳力”を持った集団と私との関わりについて、以下に若干の考察をしたいと思う。

2. 出会い

私が宮城県鹿島台町(現大崎市)に越して来たのは1997年である。子どもが小さかったため、好きな鳥見(バードウォッチング)にもなかなか出られず鬱々としているうちに、子育てサークルや人形劇、PTAなどが私の活動の中心となっていった。これはこれで楽しく、貴重な体験をしている。が、しかしである。何かが足りない。これは世を忍ぶ仮の姿だ、という思いが頭の隅に常にあった。そんなとき、当時4年生だった娘が小学校の総合学習で、「郷土を知る」のテーマの一つとしてシナイモツゴに取り組んでいた。そして同年、ブラックバスの駆除のためのシナイモツゴ棲息池の“池干し”があり、これに親子で参加したことで、むらむらと“この手”の活動をしたくなったのである。鳥でも魚でも、生き物なら何でも良かった。半ば自暴自棄(やけくそ)のようにも聞こえるが、幸い同居人もやぶなべだし、できた子どもは蛞蝓(なめくじ)をテーブルで遊ばせるほどの生き物好きとくれば、何の障害もない。かくして、郷の会との出会いは起こるべくして起こったと言えよう。



3. シナイモツゴとは

シナイモツゴ (*Pseudorasbora pumila pumila* Miyadi 1930)とは、1916年、宮城県の品井沼で採捕され、1930年に新種登録されたコイ科の淡水魚で、宮城県の地名を冠する唯一の魚である。シナイ半島とは全く関係はない。因みに“シナイ”とはアイヌ語で、大きな川(沢)を意味する。1935年以後正式な記録がなく、宮城県では絶滅したと考えられていたが、1993年、約60年ぶりに鹿島台町で再発見され、町の天然記念物に指定され



[写真1・2] シナイモツゴ(上♂、下♀)
(関山恵太氏「貴重な水辺の生き物」より)

た。環境省のレッドデータブックで『絶滅危惧 IB 類』に分類されている。

体長は 8cm ほど、産卵期の雄は体の色が黒くなり、目が半月型となり精悍な顔つきとなる。石などのまわりになわばりを作り、孵化するまで卵を守る。鹿島台ではデロコイ、ドロコイと呼ばれ、昔は普通に採って食べられていた。

モツゴとの競合、ブラックバスの侵入、生息地の環境悪化などで、個体群の維持ができなくなる怖れがある。〈写真1・2〉

4. シナイモツゴ郷の会とは

2001 年、環境庁は、シナイモツゴが再発見された桂沢ため池を始め 3 ケ所の生息池を「旧品井沼周辺ため池群」として、『日本重要湿地 500』に指定した。しかし、その中のひとつ生袋(いけぶくろ)ため池で、同年 9 月ブラックバスの侵入が確認され、これの駆除が直接の契機となって、町内外の有志により結成されたのがシナイモツゴ郷の会である。2002 年 3 月のことだ。さらに、2004 年 9 月、先駆的な活動を広範囲に展開するため、NPO 法人へと転身を図った。(現在の会員数は 129 名)〈写真3〉



〔写真3〕シナイモツゴが再発見された桂沢ため池

5. 鹿島台というところ

仙台より JR 東北線で 35 分、大崎平野の東端に位置する平地農業地域である。鳴瀬川、吉田川という 2 つの川に接し、丘陵地には沢状に農地が開け、その水源として多くのため池がつくられている。鹿島台の歴史は、品井沼干拓と水害との戦いの歴史と言ってもよく、江戸時代に始まる干拓により、現在の農地が形成された。従って、シナイモツゴが採



〔写真4〕地引き網によるバス駆除(生袋ため池)



〔写真5〕こんなに退治できたよ

補された干拓前の沼の姿は既になく、品井沼の名は、駅名(JR 鹿島台駅の一つ隣り)と魚に残るのみなのである。

6. 何をやっているのか

シナイモツゴなど貴重な魚を後世に伝えるため、シナイモツゴを保護すると同時に、生息環境を保全する活動を幅広く展開し、社会に貢献することを目的とする。これが郷の会の事業方針である。平たく言えば、シナイモツゴごと自然を守り、町おこしもしちゃえ、ということなのだ。その活動を以下に紹介しよう。

① シナイモツゴの保護

生息するため池の魚類調査や、密放流監視、池干しなど。特に池干しは大きなイベントで、会内外に参加を呼びかけ、地元水利組合や公民館、子ども会育成連合会など

の協力を得て、最後は総員泥まみれになって行われる。ブラックバスの駆除が目的だが、人間性の復活とまで言う人もいる位だ。〈写真4・5〉

② シナイモツゴの復元

里親制度を使った増殖の試みである。卵の採取と飼育方法を確立しており、県内の小・中学校や各種施設、そして個人への配布を行っている。当会が開発した画期的な採卵方法とは、何と、植木鉢を生息池に投入するだけという安価さ。100%の産卵率を誇る。卵が産み付けられたら、鉢を移植先へ移すのである。里親が育てた成魚を新たな場所へ放流し、生息地の拡大をはかっていく。〈写真6・7〉

③ ゼニタナゴの保護と復元

全国 10 ケ所と言われるゼニタナゴの生息地のうち、3 ケ所が鹿島台に存在する幸運を後世にと、力が入っている事業である。産卵させた貝(ドブガイ)を移植する方法で、新たな生息池を増やそうと試みている。

④ 環境保全活動への参加

伊豆沼方式と呼ばれる、人工産卵床を使ったブラックバス駆除法を伊豆沼で展開する、バス・バスターズの中核団体として参加している。この産卵床は苗トレーと碎石を用いたもので、産み付けられた卵をボランティアの“バスターズ”が回収することで、大量の卵を駆除できる。伊豆沼では確実に在来魚の数が回復している。〈写真8〉

⑤ 社会教育活動支援

小学校に作られたビオトープ(シナイモツゴを育てている池)での作業の支援や総合学習への協力、講話など、熟年インストラクターによる指導は好評である。時には脱線しながらも、何でも知っているおじさん(おばさん)達なのである。未来を背負う子ども達に、会員の思いは熱く注がれる。〈写真9〉

⑥ 啓発宣伝

2004 年、NPO 法人設立記念シンポジウム「生態系保全とブラックバス対策」を町との共催で開催、全国から参加者がこの何てことない一見フツウの町に集まり、情報交換は夜遅く(朝早く)まで続いたと言われる。



〔写真6〕 卵が産みつけられた植木鉢



〔写真7〕 卵と成魚の放流(手前に浮いているのが産卵鉢)



〔写真8〕 伊豆沼バス・バスターズ(人工産卵床の設置)



〔写真9〕 鹿島台小学校ビオトープでの学習



[写真10] こいづがシナイモツゴすか？



[写真11] 川にて天然ヒシの採取



[写真12] ヒシの花



[写真13] ヒシのペットボトル栽培(5月の状態、水上葉が展開)

また例年、町民文化祭へ出展しており、そのアクティブな展示は、最も賑わうブースとなっている。植木鉢がぶら下がり(産卵床の実物)、シナイモツゴの歌が流れ(総合学習で児童らが作詞作曲合唱したビデオ)、美しい疑似餌の針が怪しく光る(ため池に残されたバス釣り用各種。池干しの副産物)…。そして何と言っても、並んだ水槽の中の主役たちがいる。シナイモツゴはもちろん、その辺にいる川雑魚(かわじゃっこ)がスポットライトを浴びるのだ。子どもも大人も覗き込む。生き物はきれいだ。〈写真10〉

⑦ 関係機関や団体との連携

他の団体との情報交換も兼ね、毎年見学研修を行っている。2003年には、シナイモツゴを守る会と青森シナイモツゴの会の案内で、青森市の又八沼を訪ねた。秋田県や福島県へも赴き、見聞を広めている。

また、他団体が実施する池干しに、人員と機材を提供し、技術を伝えて交流を深めている。いろいろな人が、いろいろな所でいろいろな事しているなど感心してしまう。

⑧ その他目的を達成するための事業

さてここで、冒頭でお話したヒシが登場するのである。何故ヒシなのか。『品井沼風物詩の最たるものに菱取りがある』と町史に記載されるとおり、干拓前の品井沼には一面に菱が繁り、人々はヒシを食物として利用していた。特に水害による不作時などには救荒作物として貴重なものであり、鹿島台の民謡『菱取り唄』は全国大会が開かれるなど、ヒシは身近な植物だったのである。郷の会は品井沼の生態系の復元を目指すにあたり、このヒシの文化をも蘇らせようと、品井沼ヒシ特産化プロジェクトを立ち上げるに到った。

活動はまず、池を借り上げ栽培試験をする。在来ヒシとオニヒシを使うが、前例が無く試行錯誤である。次にこの活動を知ってもらうため、「シナイモツゴとヒシの集い」を開く。ヒシ料理の試食と情報交換セミナーを行ったところ、またまた夜遅く(朝早く)までの討論が続いたという。そ

して、今年度は新たに、ヒシのサポーターとして、ペットボトルでヒシを育てて頂く里親募集を始めた。水中の状態が観察でき、白い清楚な花も楽しめる。

ヒシを通じて、農業者、商業者、食生活改善推進員、民謡家、水質浄化作用研究者等々、様々な人が繋がってゆき、美味しい未来への夢が広がる。町おこしの醍醐味であろう。〈写真11・12・13〉

7. 再び、シナイモツゴ郷の会とは

以上、郷の会の紹介をしてきたが、ここまでさしたる障害もなく、着実に成果を上げてきたことは、私にとって驚きである。自然保護運動とは、こんなにとんとん拍子には行かないものの筈だったからだ。みちのく有料道路、春秋林道、仏沼のオオセツカ…。後の２者は世界遺産、ラムサール条約登録湿地という輝かしい実を結ぶことになったが、道は平坦ではなかったと記憶する。ではこの会とこの運動は一体何なのか。思い当たる点を挙げてみたい。

(い) 町のシンボル

守るべき対象が町の天然記念物に指定され、守る理由がわかりやすく、また、町ゆかりの地名が冠せられていることが大きな強み。

(ろ) 行政の理解

天然記念物を所管する教育委員会の後押しがあり、公民館に事務局が置かれ、町長以下の行政の理解があった。そして何より力強いことに、教育長(当時)が当会理事長である。

(は) 学術的ブレーンの存在

シナイモツゴを再発見した内水面水産試験場勤務(当時)の水産学博士が、鹿島台町民であった。専門知識を有する人物の存在は重要なポイント。

(に) 多彩な人材

魚はもちろん、植物や鳥に詳しい人、化学工業、農業、元がっこのセンセ、スズムシ飼育家、はたまた民謡、和太鼓、声楽家、写真家、登山家、蕎麦名人…良くもこれだけ集まったと思う陣容。一線を退いておられる方も多く、行動は迅速、各々腕が立つので大方のことは自前で出来てしまう。出来ないところは、即、誰かをどこからか調達してくるので、不可能という文字は存在しない。

(ほ) 地元の理解

自然保護運動で良く問題になる“地元民の頭越し”を回避できているのは、地元の会員が多いこと、間に立てる“有力者”がいることが大きい。

(へ) 好意的なマスコミと世論

イベントや作業時に積極的にマスコミを呼び、まめに記事にすることで世論を味方につける。事あるごとにTVに出ることは、歴代首相のなかでTV 登場回数が断トツの小泉首相と同じ手法である。

(と) 時代の流れ

かつての高度経済成長期と違い、日本人に自然への回帰の思いが高まり、身近な自然を見直す土壤が固まってきている。

(ち) 潤沢(!!)な資金(いつもではない)

会の運営は年 2000 円の会費で賄われている。従って、家庭の主婦の如く常に切りつめた予算で活動をする。しかし、上記 2 項に関連するが、このような活動に助成金を提供する企業や団体が増えており、審査の時の絶妙のプレゼンテーションが認められて、ゲットに到ることが一度ならずある。

(り) 土地柄

鹿島台は水との戦いに明け暮れた町である。治水が進み、水害の脅威が以前ほどではなくな

りつつある現在、疲弊した民の心が、かつての災いの元凶であった沼に住む小さな魚に思いを向け、それが生きている自然に安らぎと心の原風景を求めているのではないか。そんな風に思うのである。

いろいろと考えて来たが、鍵はやはり人である。人と人の繋がりである。中心となっているナイスミドル&シルバー達が、わけすたず(鹿島台弁で若い人たち)をも取り込み、そして子ども達へと未来を託そうとしているのである。決して派手とは言えない(はっきり言って地味な)小さな魚で、町を盛り上げたパワーたるや恐るべし、である。

8. やぶなべとは

ここまで来て、はたと思い当たることがある。この集団は、「やぶなべ」ではないか。かつて郷土の小動物展をやってしまった「やぶなべ」。イベント好きで個性的で雑多な顔ぶれは、すっかり“もつけ”の集まりだ。町民文化祭での展示は、青高祭のノリである。あの雑然さ(すみません)がたまらない。このあたりが、外来種である私がすんなり溶け込めた理由かも知れない。引っ込み思案で無口だった私が現在いろいろな社会的活動をしていることの原点は、「やぶなべ」にあったと思っている。人と交わることの楽しさである。今では、私に似て引っ込み思案な娘と、「やぶなべ」の副産物である同居人と、一家まるごと、生き物に触れ人に触れて楽しんでいる。

9. 終わりに

あるアンケートで、大切な生き物として多くの町民が、シナイモツゴを挙げていた。シナイモツゴは、もはやちっぽけな雑魚ではない。輝く銀の魚である。そして郷の会の究極の目的は、その輝く銀の魚がありふれた雑魚となった暁に、それを佃煮にして食することなのである。昔人々がそうしていたように。その日まで、郷の会の奮闘は続く。

(宮城県大崎市在住)

この稿を終えるにあたり、助言と写真の提供を頂いたシナイモツゴ郷の会に感謝を申し上げます。



[写真14] 筆者近影(文化祭会場にて)

《編集部より》

『[写真1・2]シナイモツゴ』の写真は、関山恵太氏のホームページ(「貴重な水辺の生き物」<http://homepage1.nifty.com/keichin/>)よりの転載です。快く転載を許可していただいた関山恵太氏に紙面を借りて厚く感謝申し上げます。